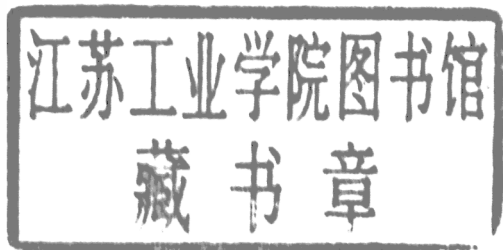


汲古書院刊



富士川英郎・松下 忠・佐野正巳編

詩集日本漢詩

第九卷

65381

詩集 日本漢詩 第九卷（第1期第五回配本）

昭和六十年十一月 発行

定価八、五〇〇円

編者 富士川 英郎

松 下 忠

佐 野 正 巳

解題 富士川 英郎

発行者 坂 本 健 彦

印刷 モリモト印刷株式会社

発行 汲古書院

102 東京都千代田区飯田橋二一五―四

電話（二五）九七六四 振替東京五十一五八〇五

©一九八五

解題

富士川 英郎

黄葉夕陽村舎詩

著者

菅茶山（かんろさく一七四八—一八二七）、名は晉帥とまのり、字は礼卿、通称は太中、茶山と号した。寛延元年二月二日、備後国神辺（現在、広島県深安郡神辺町）に生まれた。父菅波久助は神辺で農業と酒造業を営む傍ら、樗平と号して、俳句をよくした。母は佐藤氏半。茶山は明和三年、十九歳になったとき、京都に遊んで、和田東郭について医学を、また、市川某について古文辞学を学んだ。のち明和八年の頃、朱子学に転じて、那波魯堂の門に入ったが、同門の先輩に西山拙齋、中山子幹、佐々木良齋があり、茶山はこれらの人たちと親しく交った。天明元年頃、茶山は郷里の神辺に私塾黄葉夕陽村舎を開き、寛政八年からそれが福山藩の郷校として認められることになって、廉塾と称したが、彼はその後、この塾の経営と育英の仕事にその生涯を捧げたのであった。享和元年、福山藩の儒官に准じられ、文化元年及び十一年、藩公阿部正精に召かれて、江戸に出仕したが、その間、命ぜられて『福山志料』を編集した。一方、茶山は早くから詩作に長じ、晩年には江戸後期を代表する詩人として、名声が高く、その黄葉夕陽村舎は全国の多くの文人墨客の訪れるところとなった。文政十年八月十三日、茶山は神辺で歿した。享年八十歳であった。

内容その他

『黄葉夕陽村舎詩』（前篇）は文化九年三月に上梓されたが、八卷（四冊）に茶山の詩を収め、茶山の弟恥庵の詩文を収めた上・下二卷（一冊）の附録がそれに附けられている。茶山の詩は第一卷に天明二年以前の作たる古今体百八首と新樂府七首を収め、第二卷以降には、天明三年から文化六年に至るまでの詩が編年式に配列されている。

森鷗外の『伊沢蘭軒』の「その五十八」に、茶山が文化七年八月二十八日に蘭軒に与えた書簡が引用されていて、そのなかに次のような一節がある。

「詩を板にさせぬかと書物屋乞候故、亡弊弟が集一卷あまりあり、これをそへてほらばほらせんと申候所、いかにもそへてほらんと申候故、ほらせ候積に御座候。幽霊はくらがりにおかねばならぬもの、あかりへ出したらば醜態呈露一笑の資と存候。銭一文もいらず本仕立は望次第と申候故許し候」

『黄葉夕陽村舎詩』（前篇）の刊行についての話しあい、京都の書肆河南儀平と茶山との間にはじまった時期及びそのいきさつがこれで明らかに知られるが、「銭一文もいらず本仕立は望次第」とあるように、著者が出版費を少しも負担しないばかりか、書物の装幀その他も著者の「望次第」というのは、茶山のような高名の詩人にしてはじめて可能なことであつたと言ふことができるだろう。従つて茶山も書肆のこの申出には満足だつたらしく、のちに「京師書肆河南儀平損」金刊「余詩」戯贈」と題して、次のような七絶を作っている。

曾聞書賈黠無比。怪見南翁特地癡。伝奇出像人争購。却損家貲刻惡詩。

『黄葉夕陽村舎詩』卷一の巻頭には、小原業夫の序と六如上人の書簡二通が掲げられているが、小原業夫は名を正修、字を業夫と言ひ、梅坡と号した。通称は大之助である。岡山の人。備前藩の世臣で、詩及び書画をよくし、武元登々

庵と親交があったという。天保三年九月一日に五十八歳を以て歿した。

『黄葉夕陽村舎詩』の附録は上下二巻から成り、上巻に茶山の弟の恥庵の詩を、下巻に散文を収めている。

菅恥庵は名は晉宝、字は信卿、一の字を圭一と言い、恥庵と号した。早く西山拙斎の門に入ったが、のち京都や九州に遊び、寛政十年秋、京都において帷を下して、子弟に教えた。だが、まもなく病を得て、寛政十二年八月二十七日に京都で歿したのである。享年三十三歳であった。

『黄葉夕陽村舎詩』の「附録」下巻の末尾には、武元登々庵の「読恥庵集書感」という長い五言古詩と、小寺廉之の「黄葉夕陽村舎詩跋」とが載っているが、武元登々庵は備前国和気郡北方村の人で、名は質、字は景文、登々庵と号した。風流韻事を事として、海内に遊び、菅茶山をはじめとして多くの文人墨客と交った。晩年には京都に居を定めたが、文政元年二月二十四日、五十二歳を以て歿した。小寺廉之は、字を子和と言い、葵園と号した。備中国笠岡稻荷神社の祠官で、著名な国学者であった小寺清先（きよさき）の三男で、長兄清之（きよゆき）が父のあとを継いで、同じく国学者となったのに対して、廉之（けんし）は茶山に学び、のちに笠岡の豪商たちが創設した敬業館の教授となった。

因みに鷗外の『伊沢蘭軒』の「その六十五」に、茶山が文化十年七月二十二日附で蘭軒に与えた書簡が紹介されているが、そのなかに、『黄葉夕陽村舎詩』について語った次のような一節がある。

「私詩集東都へ参申候哉。書物屋うりいそぎいたし、校正せぬさきにすり出し候も有之候。もし御覽被下候はば、末梢頭（せうとう）に五言古詩の長き作入候本宜候。（登々庵武元質と申人の跋の心にいれたる詩也）。これのなき方（はう）ははじめ之本に候」。

書肆が売りにそいで、校正せぬさきにすり出したという、その巻尾に武元登々庵の「読恥庵集書感」という詩の載っていない版本が、ここにちでも何処かに残っているだろうか。

『黄葉夕陽村舎詩・後編』は文政六年に上梓された。「前編」は京都の河南屋儀兵衛の刊行するところであったが、この「後編」は河南屋儀兵衛と浪華の書肆河内屋儀助及び河内屋茂兵衛の三書舗の合刻である。全八巻（四冊）から成り、巻之一と巻之二には「前編」にもれた詩が拾遺され、巻之三以下巻之八までに、文化七年から文政三年に至る間に作られた詩が編年式に収められている。そして巻之一の巻頭には北条霞亭の序文が掲げられていて、この「後編」が刊行されるに至った顛末を述べているが、霞亭はたぶんこの詩集の校訂の仕事にも従ったのだろう。さらに、巻之八の巻尾には頼山陽と武元君立の読後感を記した文章が載っているが、武元君立は登々庵の弟で、名は正恒、字は君立、北林と号した。二十二歳のときに江戸に遊んで、林述斎の門に入った。のち池田藩の儒官となり、備前国の閑谷学校の教授に任ぜられたが、文政三年九月二十七日に、五十一歳を以て歿した。

『黄葉夕陽村舎詩・遺稿』は天保三年に上梓された。はじめの七巻（二冊）には文政四年から同十年、即ち茶山の歿年に至るまでの詩が収められ、巻之一の巻頭には頼山陽の序文が掲げられ、また、巻之七の巻尾には菅万年の「公寿詩草」が附録として収められているが、菅万年は名を養助（要助）、長作と言い、諱は万年、字は公寿で、文斎と号した。茶山の弟汝梗の子であるが、はやく茶山の養子となって、従妹井上敬（のちの北条霞亭妻）と結婚し、菅三を生んだ。しかし、元来病弱であった万年は文化八年七月二十九日に、三十九歳を以て没したのである。

『黄葉夕陽村舎詩・遺稿』のあとの四巻（二冊）は、茶山の散文を集めたもので、書名も実は『黄葉夕陽村舎文』となっている。そして巻末に菅維繩の跋が載っているが、菅維繩は前記の菅万年の子で、幼名を菅三（のち三郎）と言い、名は維繩、字は昭叔、自牧斎と号した。茶山の歿後、そのあとを継いで、廉塾を経営し、また、藩学においても授読した。万延元年七月三日に、享年五十一歳を以て歿している。

『黄葉夕陽村舎詩』前編・後編・遺稿、併せて二十七卷は、『山陽詩鈔』とともに江戸時代において最もよく読まれた詩集であるが、詩材を身近な日常生活のうちに求め、平明な言葉で、実景を写し、実感を歌うことによって、寛政以後の詩壇に大きな変革をもたらした茶山の詩の全貌がここに見出されるのである。また、この詩集はだいたいに於いて編年体で編まれているので、一面では茶山の伝記の好資料をなしているとともに、集中の、茶山が京坂地方や江戸でさまざまな文人墨客たちと応酬した多くの詩は、当時の文苑の雰囲気伝えて、文化史的にも興味が深い。私が架蔵しているこの詩集は、明治年間に青木嵩山堂から刊行されたものであるが、明治時代にはまだこのように江戸時代の版本の体裁をそのままに受けついで木版本がしばしば刷られていたようである。

なお、この詩集は昭和五十六年十二月に、葦陽文化研究会によって、その影印本が福山市の児島書店から刊行された。

書 誌

〔前 編〕

使用底本 故長澤規矩也先生蔵本 八卷附録二卷大五冊 文化九年刊 縹色表紙で、題簽は四周单边「黄葉夕陽村舎詩 一」（第一冊）。見返は左右双边で「萱茶山先生著／黄葉夕陽村舎詩／皇都書林 汲古堂梓」とあり、ケイ上部に「文化壬申歲鐫」と横書する。奥附は左右双边で「文化九年歲次壬申晚香刻成／江戸 須原屋茂兵衛／浪華 河内屋儀助・秋田屋太右衛門／京都 河南儀兵衛」第五冊は諸本により順序が異なる。使用底本は、「附録上下・読恥庵集書感（武元登々庵）・跋（小寺廉之）・奥附」の順となっている。54%縮小。

諸本

一、汲古書院本 五冊 使用底本と同じ。やや後刷りか。第五冊の順序は、「跋・附録上下・読恥庵集書感・奥附」となっている。

二、国会図書館鶚軒文庫本(A) 詩文／805 もと五冊を二冊に合本。使用底本に同じ。但し、第五冊順序は汲古書院本と同じ。

三、静嘉堂文庫本 五冊 題簽・見返・奥附とも使用底本に同じ。他本の第五冊にある跋が第四冊末にあり、第五冊は「附録上下・読恥庵集書感・奥附」の順となっている。

四、国会図書館本 138／39 五冊 弘化四年補刻版 見返は左右双辺で「菅茶山先生著／黄葉夕陽村舎詩／浪華書林 積玉圃梓」とあり、ケイ上部に「弘化丁未歲鐫」と横書する。奥附は

菅茶山先生著 黄葉夕陽村舎詩 前篇全五冊 後篇全四冊 遺稿全四冊	弘化四年丁未秋補刻 江戸日本橋南壹丁目 須原屋茂兵衛 三都書肆 京都三条御幸町角 吉野屋仁兵衛 大阪心齋橋北久太郎町 河内屋喜兵衛
---	--

第五冊の順序は「附録上・読恥庵集書感・附録下・跋・奥附」となっている。

五、国会図書館鶚軒文庫本(B) 詩文／806 五冊 弘化四年版 跋のあとに浪華書林柳原積玉圃の広告十丁がついて
いるほかは右の国会図書館本と同じ。

六、内閣文庫本(A) 206／271 五冊 弘化四年補刻本 国会図書館本に同じ。

七、富士川英郎蔵本 五冊 明治後印本 青木嵩山堂刊。

以上の通り、前編は文化九年・弘化四年・明治と三種の奥附のある本があるが、文化九年版でも各種あり、いかによく読まれ版を重ねたかをしのばせる。刷りの良さからみると、長澤本―汲古書院本―静嘉堂文庫本―鵜軒文庫本 (A)―同(B)―国会図書館本―内閣文庫本の順となるようである。

〔後編〕

使用底本 故長澤規矩也先生蔵本 八卷大四冊 文政六年刊 縹色表紙で、題簽は四周单边「黄葉夕陽村舎詩 後編 一」(第一冊)。見返は左右双边で「菅茶山先生著 〔後編〕／黄葉夕陽村舎詩／京撰 三書舖合刻」とあり、ケイ上部に「文政癸未歲鐫」と横書する。奥附は左右双边で「文政六年歲次癸未冬十一月刻成／書林 江戸 須原屋茂兵衛、浪華 河内屋喜兵衛・河内屋茂兵衛・河内屋儀助」 54%縮小。

諸本

- 一、国会図書館鵜軒文庫本(A) 詩文／805 もと四冊を二冊に合本。題簽・見返は使用底本に同じ。奥附は使用底本の版元二番目、浪華河内屋喜兵衛が京都河南儀兵衛に入れ替っている。奥附前に浪華書房の広告二丁がある。
- 二、静嘉堂文庫本 四冊 右の鵜軒文庫本(A)に同じ。但し広告はない。
- 三、内閣文庫本(B) 206／272 四冊 使用底本に同じ。
- 四、汲古書院本 四冊 使用底本に同じ。但し第四冊末に「浪華書林岡田種玉堂藏板書目 河内屋儀助」五丁が附されていて、その五丁目裏に「大阪書肆 河内屋儀輔」の版元名はあるが刊年表記はない。
- 五、国会図書館本 138／39 四冊 弘化四年版(奥附) 題簽・見返は使用底本に同じ。奥附は前編(前編諸本四奥附参照)と全く同じものを使用しているので一応弘化四年としておく。

六、内閣文庫本(A) 四冊 右の国会図書館本に同じ。

七、国会図書館鵜軒文庫本(B) 詩文／806 四冊 安政三年版 題簽・見返は使用底本に同じ。奥附は四周单边で「安

政三丙辰年改正」とあり、ついで江戸・名古屋・京都・大阪四都の書肆五軒の名前がある。広告はない。

八、富士川英郎藏本 四冊 明治後印本 青木崇山堂刊。

後編第三冊、巻五の十一・十二丁の版心の丁付がある版と欠けた版がある。ある版は、国会図書館鵜軒文庫本(A)と静嘉堂文庫本で、刷りの良い順は、鵜軒文庫本(A)―静嘉堂文庫本―汲古書院本―長澤本―内閣文庫本(B)―鵜軒文庫本(B)―国会図書館本―内閣文庫本(A)となることと合わせ考えると、右の丁付の一部欠けた版は、後印本であると判定できよう。

〔遺稿〕

使用底本 汲古書院本 詩集七卷附録一卷文集四卷 大四冊 天保三年刊 縹色表紙で、題簽は四周单边「黄葉夕陽村舍詩 遺稿 一」(第一冊)。見返は四周单边で「菅茶山先生著 遺稿」黄葉夕陽村舍詩文全四冊／京撰 四書堂合梓」とあり、ケイ上部に「天保壬辰新鐫」と横書する。奥附は左右双边で「天保三年歲次壬辰夏四月刻成」ついで江戸・京都・浪華の書林五軒を連ねている。54%縮小。

諸本

一、静嘉堂文庫本 四冊 見返はなく、奥附は使用底本と同じ。

二、故長澤規矩也先生本 四冊 見返は使用底本と同じ。奥附は三都書林八軒の連名で刊年表記はない。奥附前に浪華書房河内屋茂兵衛の広告二丁がある。

三、国会図書館鵜軒文庫本(B) 詩文／806 四冊 見返は使用底本と同じ。奥附は京都河内屋藤四郎以下十一名の連記となっており、刊年表記はない。奥附前に群玉堂の広告九丁がある。

四、富士川英郎藏本 四冊 明治後印本 青木崇山堂刊。

刷りの良い順は、静嘉堂文庫本―汲古書院本―長澤本―国会図書館鵜軒文庫本(B)となる。なお、国会図書館本138／

39、同鴉軒文庫本(A)詩文／805、内閣文庫本(A)206／271、同(B)206／272には遺稿は附されていない。国書総目録によれば、弘化四年版もあるとの事、前編後編も合わせ明治に至るまで版を重ねたのであろう。

菅茶山花月吟

著 者

菅茶山（前出）。

内容その他

文政十一年正月に大坂の書肆河内屋吉兵衛と加賀屋善藏によって刊行された。巻頭に中村耘の序文を掲げ、巻尾に菅茶山の「題花月吟後」と篠崎弼の跋文を載せている。

中村耘は字を圃公と言い、通称は元三郎、畠州と号した。姫井桃源、赤松滄洲、皆川淇園、六如上人らに学び、のちに備前藩の藩儒となった。茶山や頼山陽などとも交遊のある間柄であった。

さて、『花月吟』二十首は、茶山が若い時、唐伯虎の同じ題の律詩の体に倣って作ったものであるが、当時の詩壇を支配していた護園派の詩風の影響をうけて、「織靡」であったために、茶山自身はその詩集（『黄葉夕陽村舎詩』）のうちに収めなかったのだという。『花月吟』が中村圃公の校訂を経て上梓されたのは、茶山が歿する少し前のことである。

茶山と同じく若いときに京都で和田東郭に医を学び、のちに有名な眼科医となった土生玄碩がその晩年に弟子に口述した『師談録』という書物のうちに、次のような一節がある。茶山が和田東郭の門に入っていた頃のエピソードを

伝えたものである。

「(茶山) 嘗て月梅詩各二十律を賦して、之を和田先生に示す。先生、之を村瀬栲亭に示す。栲亭、嗟歎して曰く、宿儒と雖も及ぶべからざるなり」

この「月梅詩各二十律」というのは、どんな詩であったのか。もちろん、これは単なる臆測にすぎないが、そのうちの月の詩二十律は或は『花月吟』二十首ではなかったろうか。もしもそうだとすれば、この『花月吟』は明和から安永へかけての頃、茶山の二十歳代に、京都で作られたということになるのである。

因みに、私が所蔵している『菅茶山花月吟』は明治年間に大阪の青木嵩山堂から刊行されたものであるが、これには中村圃公の序文も、茶山の題言もない。しかし、校訂者は中村圃公で、巻頭には田浦晋、篠崎小竹、山岐積善の序文が掲げられている(書誌参照)。田浦晋については知るところがないが、山岐積善は山木積善だろう。字は伯廈、通称は善太で、眉山、または狂庵と号した。伊勢国亀山の藩儒であった。

書誌

使用底本 慶応義塾大学斯道文庫本 中一冊 文政十一年刊 黄色表紙で、題簽はない。見返は四周单边で「備後菅茶山先生著／花月吟／余曩為某生校此篇將捧之有一生竊而刻之謬誤不少因今改刻云／畠洲漁隱識」 本文は十丁で七行十五字詰。奥附は「文政十一年戊子春正月発行／大阪書舗 河内屋吉兵衛・加賀屋善藏」78%縮小。異本

一、静嘉堂文庫本 半一冊 薄茶色表紙で、書き題簽「茶山先生花月吟 完」 書扉があり四周双边で、上部に鬼が両手を掛けて上から覗いているイラストがあつて「中村先生校／茶山先生花月吟／修堂藏版」とある。田浦晋の「文政甲申(七年)冬十月下浣」序と篠崎弼の「文政甲申十一月」の跋がある。本文は八丁で九行十七字詰で使

用底本と内容は異なっている。

二、富士川英郎蔵本 半一冊 茶色表紙、書き題簽で「菅茶山先生花月吟 全」 見返は赤紙刷りで四周双辺「菅茶山先生著／菅茶山花月吟／浪華 青木嵩山堂梓」 静嘉堂文庫本にある田浦晋序の次に篠崎弼跋があつて両者の「文政甲申」の年月がなくなっている。その次に山岐積善の序が新たに附されている。本文は静嘉堂文庫本に同じ。奥附は刊記なく「和漢洋書籍発兌処／青木嵩山堂」となっている。

以上から、菅茶山花月吟は、文政七年序を附した本（静嘉堂文庫本）が刊行されたが、誤りが多いとして文政十一年に改訂版（斯道文庫本）が出た。ところが明治になって、文政七年版に山岐積善の序を加えて再び刊行されたことがわかる。

嵯峨樵歌

著者

北條霞亭（一七八〇—一八三三）、諱は讓、字は子讓、通称讓四郎、霞亭、または天放生と号す。安永九年九月五日、志摩国的矢に生まれた。父祖は代々、的矢において医を業とし、父道有もまた儒医であった。霞亭は寛政九年、十八歳のときに京都に出て、経学を皆川淇園に、医学を広岡文臺に学び、山口凹巷（韓聯玉）、鈴木小蓮、清水雷首、下田芳沢、本山仲庶らと識りあつたが、殊に山口凹巷とは終生の友となった。享和二年に霞亭は江戸に赴き、亀田鵬斎の塾に寄寓し、また湯島の昌平黌にも出入していたらしい。文化五年に故郷的矢に帰り、やがて宇治の林崎文庫の長となったが、文化八年、林崎文庫を辞して、京都に上った。そして嵯峨に住み、『嵯峨樵歌』を文化九年に上梓したが、その巻頭に茶山の序文を乞うたことが機縁となって、翌十年三月に霞亭は神辺に茶山を訪うた。やがて茶山の要請に

よって、彼はその廉塾の都講となつて、神辺に移り住み、そして文化十二年には茶山の姪と結婚して、菅家の一族となつたが、文政二年に阿部侯に召しかかえられ、同四年には江戸詰めとなつた。だが、その頃から健康を害し、文政六年八月十七日に、江戸で、四十四歳を以て歿したのであつた。墓は巢鴨の真性寺にあるが、森鷗外に詳しい史伝『北條霞亭』があることは周知のところだろう。

内容その他

文化九年七月に京都の書肆梶川七郎兵衛から刊行された。巻頭に菅茶山の序文と山口凹巷の長い五言古詩を掲げ、巻尾に釈承宣の跋文を載せているが、山口凹巷は名は穀、のちに^か狂と改めた。字は聯玉、通称は長次郎、楊庵、または顛庵陳人と号した。遠山文圭の第二子として、安永元年に伊勢国山田に生まれたが、十四歳のときに山口迂叟の養嗣となつた。山口氏はその先、大内氏に出るを以て一に韓氏と称したが、彼の名はしばしば韓聯玉を以て知られている。経学を皆川淇園に、詩を菅茶山に学び、のちに山田において恒心社という詩社を結んで、その盟主となつた。北條霞亭とは早く京都で識りあい、その生涯の友となつた。

釈承宣は道号を月江といい、嵯峨の三秀院の住職であつた。霞亭は文化八年七月にこの三秀院に属している任有亭に住んだが、月江とはそのとき以来、親しく交つたのである。

『嵯峨樵歌』は、霞亭が文化八年に京都に出たのち、先づ二月に下嵯峨の藪の内に借家して、これを幽篁書屋と称し、七月に嵯峨の三秀院の任有亭に、十月、さらに梅陽軒に移つた間の時期に作つた詩を集めたものであるが、茶山はその詩風を称して、「其詩力写^ニ実境^ニ而不^レ逐^ニ時尚^ニ余之所^レ嫌^ニ於衆作^ニ者子讓或能言^レ之^一」と言っている。霞亭は茶山のこの序文を道光上人を介して手に入れたのであるが、文化九年六月十四日附で父適齋に寄せた手紙のなかで、そのときの喜びを報じて次のように語っている。

「嵯峨樵歌」も近々出来上り申候。大方来月初旬迄には仕立候積りに御座候。此節雲州の道光上人御上京兼而頼遣置候備後福山神辺の老儒菅太仲先生の序文出来参り申候。御聞及も有之候哉、この太仲と被申候人は那波魯堂先生（原註播州の人、宝暦の頃の大儒、京住）門人に而、当時は三都にも肩をならべ候人なき程の詩人にて候。尤甚名高き人に御座候。樵歌序文甚おもしろく出来参り辱奉存候。右の道光上人と申は法華の高徳に而、詩も餘程出来候人に候。これも菅太仲など懇意の人に候。世間に而甚人の信用いたし候僧に御坐候」（森鷗外『北條霞亭』より）。

書誌

使用底本 故長澤規矩也先生藏本 大一冊 文化九年刊 縹色表紙 題簽は四周单边「嵯峨樵歌 全」 見返は四周双辺で「霞亭山人著／嵯峨樵歌／歳寒吟社藏」 奥附は四周单边で「文化壬申年七月／京都書林 梶川七郎兵衛」とある。53%縮小。

諸本

一、国会図書館鵜軒文庫本(A) 詩文／1208 大一冊 使用底本と同じ。初印本か。

二、国会図書館鵜軒文庫本(B) 詩文／1209 大一冊 紺表紙 題簽・見返は使用底本と同じだが、奥附は京都河内屋藤四郎以下大阪河内屋茂兵衛まで十一名の書林連記となっている。跋のあとに群玉堂の広告八丁を附す。刷りは後印。

三、佐野正巳氏藏本 右鵜軒文庫本(B)と同じ後印本。

四、内閣文庫本 大一冊 縹色表紙 見返と奥附を欠く刊年不明本。卷末に「浪華書林岡田種玉堂藏版目錄 河内屋儀助」の広告四丁を附す。後印本。

国書総目録によれば文政三年版もある由。

霞亭二稿

著者

北條霞亭（前出）。

内容その他

「薇山三観」と「帰省詩囊」の二部から成っている。「薇山」とはここでは備後のことで、「三観」は三原の梅と、山南の鯛網と、竹田の螢とである。霞亭は文化十年八月に神辺の廉塾の都講となったのち、同十一年の初春に三原の梅を、同十三年の初夏に山南の鯛網を、仲夏に竹田の螢を見た。それらのときに作った詩を集めたのが「薇山三観」である。文化丙子（十三年）仲夏に執筆された井達夫の序を巻頭に掲げているが、井達夫は、浅井氏で、名は毅、通称は十助、霞亭が嵯峨に滞在していた頃からの友人である。

「帰省詩囊」は霞亭が父適齋の古稀の賀宴に列するために、文化十三年七月中旬から九月中旬に至るまでの二ヶ月間、郷里的的矢に帰省したときに作った詩を集めた詩集である。霞亭はその往復の途上、ともに京都に立ち寄っている。浅井達夫は此の集にもまた序文を寄せた。

書誌

使用底本 富士川英郎蔵本 半一冊 題簽なく、「薇山三観」「帰省詩囊」「霞亭二稿」と墨書してある。見返は四周單辺で「北條先生著／霞亭二稿／歳寒吟社蔵」奥附は広告末に「大阪書林 河内屋儀助」とあるのみで刊年はない。嵯峨樵歌と同じく京都の書肆梶川七郎兵衛刊の後印本であろう。61%縮小。